青山同窓会会報

発行所
青山同窓会
新潟市関屋下川原町二
新潟高校内
印刷所 オリオン印刷㈱
0252-83-2151

ごあいさつ

青山同窓会会長 鍵冨 清一郎

暑い夏です。総会の季節です。今年も又元気で、たくさんの校友同窓に会えるのは本当にうれしいことです。

昨年から、着席の総会となって、ゆっくりと話し合えるので年寄りにはありがたいことです。いつも学年の幹事の人達のごくろうには感謝しています。

青陵祭

青山随想

60回 上杉雅之（校内幹事）

★「異形なものに接したい」のが人間の本性の一つという。この欲望が文化を生み、芸術を育てるのに何らかの役割を果してきたのは間違いないだろう。安定を求めて人間は努力をするが、いざその安定が得られると、そこに生まれるマンネリから脱したい、何か異形なるものにふれてみたくなるのである。

★判で押したような毎日の生活、仕事の大半をコンピューターが間違いなくやってのける職場、無理やり入り込んでくる紋切り型のマスコミの情報。しかしこの現実からは逃げ出せないでいる。こんな現代日本人の前に現われたのがあのエリマキトカゲ。狭い日本中を電波にのってかけめぐり、やんやのかっさいを拍している。人気を呼んでいるのはその怪物君がエリマキを立てて向かってくる姿ではなく、奇怪な身のこなしで逃げて行く後姿のようである。どうもそのことが気になるのは私一人だけなのだろうか。

★こちらは青陵祭である。エリマキ君も登場してのにぎやかな祭りだったが、審査員、特に他高校の審査員の評が今年はうれしかった。

「例年のマンネリ化の傾向、それを変えよう、そこから脱しようとする連合創造があった。」と指摘してくれた。久しぶりにさわやかな印象の残る青陵祭であった。

★新潟市の西のさい果、西船見町にある大手建設業F組の資材置場。そこの番人Nさんに挨拶に行くのが決って六月の初旬である。

「県高の青陵祭の桟敷ですね。本社の上の人から連絡を受けて待っていましたよ。」このことばと、事務所の入口を飾るNさんの丹精の作品さつきの鉢植えが毎年われわれを暖かく迎えてくれるのだった。

今年Nさんの姿はなかった。さつきの鉢も。定年でやめたと、応待に出た若者に告げられた。今年の青陵祭を〝Nおじいさん〟はどこであのやさしい心の眼でみていてくださったのだろうか。

昨年の青陵祭全景（沢田俊一 撮影）

東京青山同窓会 新人歓迎会について

幹事長43回 田中一郎

東京青山同窓会では母校を卒業して進学その他で上京した人達の歓迎会を昨年から始めた。

昨年は準備期間が少なかったため、総会の中にくり入れて、7月8日実施したが、今年は総会（11月予定）と分離して、学年幹事が中心となって新人を歓迎するという形式で5月25日夜、東京、四谷の主婦会館で開催した。

南学会長40回田中幹事長43回の歓迎の辞に続いて、新人を代表して野島康祐君92回のあいさつ、母校を代表して上京された上杉雅之先生60回のごあいさつがあった。引き続き「東京生活術講座」と題し明治大学工学部助教授茅原一之さん73回と早稲田大学政経学部学生江口順一さん90回のお二人から先輩としてのアドバイスの講演があった。

祝宴に入り、出席の最長老佐藤岩男さん33回の音頭で乾杯、老若入り混って歓談。

喜寿に近い佐藤さんと新人の間には59の年令差があり、まさに親、子、孫三代の集いであった。

宴たけなわとなるや、新中高の校歌をはじめ、放歌高吟もあり、先輩諸氏も負けじとがなりたてた。また男子中学出身の先輩諸氏にとっては思いもかけぬ孫娘のような女子後輩に眼を細めて話しかけたりして和気あいあい。大いに若返って楽しんだひとときだった。

新人諸君も、各界に活躍している諸先輩の元気な姿に接して、大いに得るところがあったように見受けられた。

最後に浅見副会長51回のあいさつで2時間半にわたる盛会の幕を閉じた。出席者は先輩59名、新人51名、計110名であった。来年以降もますます盛大に続けてゆきたい。

＝会長に聞く＝

鍵冨会長に青春時代を聞く

昨年8月に鍵冨会長が、めでたく九十一才の誕生を迎えられたので、はるか遠い昔の事、中学時代、そして青春の頃の事をお聞きしてみた。

聞き手のお相手として、長らく母校の教壇にあり、又校内幹事であった沢山厳先生。

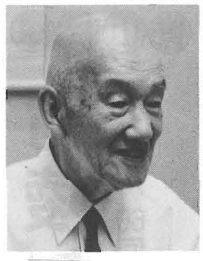
尚、聞き取り役は、編集を担当の67回石田で、はるか生まれる以前の話しもあり、意味不明の点はお許し願いたい。

沢山――当時の服装などは？

会長――学生服のそでに赤センが入っていて、帽子にも赤センが入っていた。帽子をかぶってこないと先輩になぐられたものだ。

沢山――会長のクラブ活動などは？

会長――小学――中学と野球をやっていた。守りはファーストベースであった。10年位前に卒業した先輩達が、夏休みになると5～6人教えにやって来て、一諸にやってくれた。当時市内で野球をやっていたのは商業だけであったが、前の年に三校ボート事件があり、大ゲンカした後なので、



対外試合は禁止されていたのだが、学校には内緒で野球の試合をしたので、商業の人達とも仲よくなった。

沢山――中学から慶応に行かれたのですね。

会長――私の親に慶応に行っても野球をやるなら、学校へはやらない、といわれ、やらない約束で慶応に行った。

しかし結局又野球をやって、小―中―大学（予科）とずっと野球を楽しんだことになる。

当時東京へは、長野まわりで13時間もかかった。

親父が酒を飲んだので、決してのむまいと思って、大学を卒業するまで飲まなかった。

沢山――会長、酒もなかなか強かったと聞いていますが、いつ頃から？

会長――慶応を卒業して、第四銀行の東京に入った。仕事でも必要だといわれ、飲みはじめたが、素質があったのか親父より酒飲みになった。

毎週土よう日になると、東京から、新潟の古町まで飲みに通って評判になった位だ。

沢山――慶応から、第四銀行東京時代、又、ロンドンへ行っておられた頃、等々いろいろ面白い話しがあるらしいのですが、それは又、いつか後日伺うとして、同窓会長になられたのは、いつですか？

会長――確か昭和32年6月の総会だったと思います。長谷川寛先生のあとだと思います。29年に母校が焼けて復興募金集めをやっていた頃でした。

募金をやるようになり、同窓会が活発になった。当時の学内幹事が沢山先生でしたね。

沢山――その頃のことで何か岩田さん覚えていませんか。

岩田――私は昭和26年に同窓会へ入りました。当時は志賀さん（志賀先生のお母さん）が先に入っておられ、2人でした。創立60周年の頃は（昭和27年）まだ、学年別のまとまりはなくて、個人的に、主だった先輩のところに募金にまわりました。

又、火災の復興募金は、当時の金で一万円で3年分割でした。

沢山――同窓会としては、60周年記念がややスタートで、29年の火災募金で基礎が出来たようです。

同窓会の草わけというと、昭和24年に古町の青山クラブが万松堂の2階にあり、当時は志賀さんが手伝いとして勤めていました。クラブ設立には長谷川寛12回、本田喜作19回、原隆太郎26回さん等がご尽力されたそうです。クラブには限られた長老が集まってきていまして、若手としては、小甚の小山さん、亡くなられた元幹事長の斉藤希弐さん、だったので、年の経つのは早いものだと思います。常連で、毎日顔を出したのが、長谷川寛さん、本田喜作さんでした。

又、長谷川さんの前の会長は、濁川の大地主の真島忠太郎さんでした。

沢山――会長、中学時代のことで何かありますか？

会長――当時は寄宿舎があり県内各地から、地主の息子やだんな様の子供が来ていたものでした。寄宿舎には100人位いたようです。

沢山――色々ありがとうございました。又こんな機会をもちたいものですね。

編集子（石田）――昔語りをいろいろ聞いて、ペンをとるのを忘れて聞いていたり、話しがあちこちへ飛んだり、大変であった。それにしても会長はお元気であり、又、古い事をよく覚えておられる事に感心した。新中と慶応のことは本当に楽しい思い出であるようでした。

母校では今……

文武両道　活躍する後輩達

北信越大会の戦果

陸上競技　男子

百米　丸山明生　予選敗退

百十米H　市川浩介　準決敗退

〃　長岡勳司　予選敗退

三段跳　杉田勝好　予選敗退

五千競歩　大矢　聡　12位

走巾跳　小林義治　6位　7m021cm（インターハイ出場）

四百米R　4位　43秒12（インターハイ出場）

一六〇〇米R　5位　3分21秒12（インターハイ出場）県高校記録

女子走高跳　横沢美貴　2位　1m74（インターハイ出場）

剣道

男子団体　予選リーグ敗退

女子バスケットボール

一回戦新潟高46対56足羽高

軟式庭球男子

聞嶋圭太・後藤忠之組一回敗

関根清文・小菅洋司組2回敗（インターハイ出場）

空手道

個人形　仲山路子　予選敗

軟式庭球女子

三浦彩子・白須佳子組ベスト16位（インターハイ出場）

田村直子・堀川千鶴子組2回敗

フェンシング男子

団体　2回敗

個人　湯浅力　準決敗（インターハイ出場）

市川雅文　1回戦

杉山佳隆　3回敗（フルーレ個人インターハイ）

片桐史裕　準決敗（フルーレ個人インターハイ）

遠藤徳夫　2回敗（エペ　個人インターハイ）

フェンシング女子

団体　1回敗

個人　原ひさ子　2回敗（インターハイ出場）

卓球

本間詩雨　3回敗（インターハイ出場）

漕艇　男子ナックルフォア決勝戦荒天で中止（インターハイ出場）

大学別合格者数（合格者延数）

国立	57年	58年	59年
北海道大	6	2	3
東北大	32	30	27
筑波大	7	10	6
千葉大	8	4	5
東京大	14	9	11
東京外語	4	6	8
東京学芸	4	3	4
東京工業	7	9	7
お茶の水	2	4	3
一橋大	5	4	3
新潟大	176	159	156
京都大	6	7	8
国立小計	305	284	287

私立	57年	58年	59年
学習院大	7	5	5
慶応大	28	25	34
駒沢大	4	5	10
上智大	14	8	16
成蹊大	6	5	8
成城大	7	8	7
専修大	8	9	19
中央大	32	34	29
津田熟大	2	1	3
東京女大	6	3	7
東京理科	36	40	33
日本大	21	21	26
法政大	21	22	27
明治大	32	24	17
明治学院	11	14	9
立教大	11	18	12
早稲田大	50	55	66
同志社大	1	8	6
立命館大	6	3	4
私立小計	461	444	502
国公私立合計	846	775	872

邂逅、無常

45回　白倉　正

Yさん、お便り有難うございました。記憶にない女性からの御手紙にびっくり致しましたが、達筆、達意の文を読んでいる中に、三十五年前の新津第一小学校が思い浮んで来ました。一寸した新聞記事が、このような再会（直接にはまだお会いしていませんが）の縁を作ってくれるとは思いもよりませんでした。私の学級の隣の組の生徒で、時々印刷の紙めくりを手伝って下さったその少女が、三十五年後も斯くも鮮明にその時のようすや会話まで記憶していて下さるとは、誠に教師とは有難いものであり、またこわいことでもあります。

二度目のお便りで、あなたの御母堂の祖国が中国であることを知りました。満州事変から日華事変へ、それから太平洋戦争へと広がって行くのを、御母堂はどのような眼で、お気持で見て居られたのでしょうか。それを思い、戦後の御苦労を思う時、胸が痛くなります。昨年夏御母堂と妹さんをお連れして北京へ行かれたとのこと、個人としての訪中では手続等難しかったでしょう。敢てそれを実行させたものは、あなたの深い孝心でありましょう。黒竜江省、河南省、四川省とちりじりになって居られる伯父様、叔母様の御家族と三十八年振りに北京で再会されたとのこと、その感激の場面を想うと涙が流れます。あなたが生れ育った奉天、よく遊びに行かれたという新京へも、御母堂と共に訪れる日の早からんことを祈って居ります。

そこに、立ってみなければわからないスケールの大きい中国大陸、そこに住む人々、そこに生れた文化、たまらない魅力を感じます。私も一昨年北京、西安を訪れました。万里の長城へ行った日は、晴天でしたが風の強い日でした。私は月光を浴びて独りそこに立ってみたいと思いました。これを築く際の使役の人々、あるいはここで戦った兵士達の叫び声が、故郷を、母を呼ぶ声が聞えて来るのではないだろうか、そんな想に捉われ、しばし多数の観光客の存在を忘れ、強風に吹かれていたことでした。

今年の長い冬、大雪にいためつけられた樹木も、緑が濃くなって参りました。時々郭公の声が聞えます。この季節になると昭和廿一年の六月を思い出します。私が九死に一生を得て大陸から帰って来たのが、六月の下旬でした。まさに国破れて山河あり、その緑の美しさは眼にしみました。室にまで緑がこぼれるようであり、広げた書物の頁まで緑に染まるように感じました。郭公の声は幼い頃を思い出させ、生きて帰ったことを改めて実感させるものでした。

その大陸（南支）で、私の人生を豊にして下さった方にめぐりあいました。四十三歳で召集され、当時富士銀行の支店長であった南さんという方でした。十八年の秋、広西省に居た私どもの中隊に南少尉は配属されて来られたのです。丁度二十歳年上の、人生の大先輩と親しく話し合うようになったのは、敗戦後でした。帰国後は長期の休暇の度に、鎌倉市極楽寺の閑静なお宅へお伺いするのが楽しみでした。また十年程前に、白倉が育ったところを一度行ってみたいと言われて、御夫妻で新潟へ御越しになり、茅屋に泊って行かれました。昨年九月廿四日他界されました。私の心残りは、その二年前から、長女の病気のために、お会いする機会をもてなかったことであります。病の篤いことを知り、九月初め病院を訪れた時は大変喜んで下さいました。これからは毎週お見舞しようと思い、新幹線の回数券を用意しましたが、三回目御伺いする直前に訃に接しました。将校になり切れなかった人と、兵になり切れない者とが戦地で邂逅し、尓後四十年に亘る交誼でありました。

昨年の哀しみはそれだけではありません。中学校二年、三年と同じクラスになったのが縁で、尓来五十年交遊のあった川上喜八郎君が一月不帰の客となりました。癌なる病魔が彼を奪い去ったのです。只茫然とするのみでした。二十年の三月広西省の野で弾に当った時、私はこれで一巻の終りと思い、ひそかに祖国の彼にさよならを言い、死を待ったのでした。その私が、彼が死の直前に書いてくれた「自分を大切にしたい」という色紙と写真に、朝な夕な相対しているのです。

また二年間癌との壮絶な戦を続けた長女も、間もなく川上君のあとを慕うが如く亡くなりました。二人の子を私達に託して。

昨年は、六十年平凡に過して来た私にとって、「無常」を思い知らされた年であります。

あなたの、中国へ行かれたということ、また「人々との邂逅は、時には不思議な機会に始ることが……」というお便りから、つい筆がすべりました。

Yさん、お会いできる日を楽しみにして居ります。直接お会いすると、あなたの幼い頃の夢をこわすことになるかも知れませんが、夢がこわれたら、それもまた無常と観じて下さい。

お元気で、さようなら。

所変われば

70回　小谷桂子（旧姓 吉浦）

風光明媚で、古くから日本人には馴染の深い「大連」も、いざ生活してみると存外、不便な所である。生活用品等、日本からみると無い無い尽しだが、それは創意工夫や日本からの取寄せで事足りる。何より困ったのは、「住」が不安定なことである。中国では外人は自由に住居を捜すわけにはいかない。決められた外人専用ホテルを割当られる。これは一般旅行者の場合も同様である。私の所とて御多聞にもれずで、郊外の林の中に幾つかのコテージが点在する、そのホテルの一部を借りて生活していた。解放軍と呼ばれる軍隊が、ホテルの要所々々で剣付鉄砲を手に見張りをしている。春には桜、初夏にはアカシヤが咲き、夏には徒歩数分のプライベートビーチで水泳、秋には虫の音、冬にはバード・ウォッチングと、四季を通して自然と一体の生活は厳しくもあり、反面日本ではもうなかなか味わえぬぜいたくな生活でもあった。ただ夏になると突然「住居を出て欲しい」と云われる。日本なら事前にどういう理由でいつ迄と説明付きだが、当地は「出てくれ」の一言のみ。そうなれば日本から取寄せたクーラーを付けた部屋を放棄、台所もない小部屋への移動を余儀なくされる。来客接待も商売のうちの商社マンとしては、ホテルに内緒でバスルームでカレーを作って供したりする。どうやらこのホテルは夏になると、国家指導者が避暑を兼ねて会議を行ない、その警備の都合上、我々を移動させるのだと飲み込めた。二年目の夏も、年中行事となった小部屋への移動。約一ケ月後、やっと元に戻るがその折、「近々もう一度出てもらう」と珍しく予告付であった。それがある日突然に「二日後、別に用意した住居に荷物と共に引越せよ」との命令である。そんな理不尽な話はない。「たった数日前した約束と違うではないか」とさんざん抵抗してみれども「上からの命令」の一点張り。「上からの命令」この言葉は中国ではもうオールマイティである。二晩徹夜の末、トラック八台分の家財もろとも新居への引越と相成った。八十三年九月のことである。（この折は金日成・鄧小平・胡耀邦会談と判明）八十年末日本をたち、北京一年半、大連二年の滞在、今年五月帰国する迄の足かけ五年、毎年引越していたわけである。かくして今も又、船便が着き、荷物の山と格闘中である。

画人笠原軙とその父漁村(五)

60回　小林智明

総源寺に墓参の後、漁村は相川の海岸を散策して旧懐にひたった。そこは自分の号とした「漁村」のよりどころでもあった。また古い知友たちと酒も酌み交した。次の二首の七律には、漁村五十才の帰郷の思いが詠われている。

無復青樽共唱酬　復た青樽の唱酬を共にする無し
越山湘水思悠々　越山　湘水　思ひ悠々たり
酌花麗澤軒前酒　花に酌む　麗沢軒前の酒
載月富崎汀上舟　月を載す　富崎汀上の舟
潦倒功名違夙志　潦倒して功名は夙志と違ひ
依稀光景入新愁　依稀として光景は新愁に入る
當時故舊凋零盡　当時の故旧は凋零し盡し
今日誰偕話昔遊　今日誰と偕にか昔遊を話さん

偶爾帰来愧舊明　偶爾　帰来して旧明を愧ず
依然昔日木強生　依然たり昔日の木強生
樽邊鬪酒前無敵　樽辺　酒を鬪はして前に敵なく
紙上揮毫自有聲　紙上　毫を揮へば自ら声有り
漫罵英雄是豪快　漫りに英雄を罵りて是れ豪快とし
時評脂粉亦多情　時に脂粉を評して亦多情たり
行人不免離鄕恨　行人免がれず　離鄕の恨み
蓐食明朝又發程　蓐食　明朝　又　程を発す

後の詩には「相川を去るの前夕、某楼に飲み、賦して以って来会の諸子に示す」とある。

その夜漁村は、今はたった一人の肉親である姉を長谷川家に訪ね、久し振りにつもる話をした。幾度も盃を飲み重ねて、夜の更けるまで話は盡きなかった。その時の「姻家の長谷川氏を訪ね、姉氏と酒間に旧を話す」の詩は、骨肉の情が惻々と伝わってくる。

何堪悲喜話中生　何ぞ堪えん悲喜話中に生ずるを
強把殘杯坐二更　強いて殘杯を把り二更に坐す
骨肉纔存唯一姉　骨肉わづかに存す　唯一の姉
短宵難盡至親情　短宵　盡し難し　至親の情

翌十五日は蓐食（じょくしょく）（早朝、寝どこでする食事）早暁に相川に別れを告げて出発、金北山に登った。音羽池の浮島などを見て、妙見から金北山頂に至り、眼下に日本海を眺めて両津に下った。両津、真野の両湾は池のように見下された。

陰厓六月雪消遲　陰厓　六月　雪の消ゆること遲し
怪得天風冷透肌　怪しみ得たり天風　冷　肌を透すを
礪帶美哉山海固　礪帶　美しき哉　山海の固め
山如城郭海如池　山は城郭の如く　海は池の如し

かくして一週間の修学旅行を終え、十六日両津夷港より梅雨濛然たる海に船出して新潟に帰港した。

当時の新潟、両津間の船旅は、今日よりも長い時間を要したことは言うまでもない。因みに明治四十年に佐渡に渡った河東碧梧桐の『三千里』によれば五時間を要したとある。

新潟港には二百余人の生徒、職員が整列して出迎えた。漁村にとっては、実に感慨無量の帰省を兼ねた修学旅行であった。

明治三十五年は漁村五十才。軙は最上級の五年生であった訳だが、この佐渡旅行に加わっていたのかどうかはっきりしない。

またこの頃の漁村の作に「夏日、一兒轍軙及び外甥深を携へて青山に遊ぶ」という次の詩がある。

碧水青山松一邱　碧水　青山　松一邱
林間平望接江頭　林間　平望　江頭に接す
舟帆幸得快風便　舟帆　幸に快風の便を得て
箇々如飛遡上流　箇々　飛ぶが如く上流に遡る

父子甥の一団が青山の松の丘に上り、信濃川の帆舟を眺めている夏の景である。

次に注目すべき記事は、遊方会雑誌第十二号（明治三十六年二月発行）に、父の漁村と息子の軙の投稿が、そろって記載されているもので、漁村の「某生の東京に赴くを送るの序」と、軙の「妙義山に遊ぶの記」である。

前者の方は、幼時より漁村の教えを受けた某生徒が、新潟中学に入り、成績も稍頭角を表わし、やがて卒業。東京の某校に入学。將に赴かんとして別れを告げに来たるを激励、これを送る文である。

後者は、明治三十五年、軙が五年生の夏休に同級の佐藤荘一郎、山岸宏次郎、諸橋宏の三人と一緒に群馬県の妙義山に登山した、漢文一千五百字ほどの紀行文である。長文なのでここに記載はできないが

「妙義山、上毛碓氷郡に在り。奇峻を以って著はる。三峯有り。曰く金洞、曰く白雲、曰く金鶏。而して金洞の名、夙に世に喧し。金鶏に至れば、人跡始ど絶ゆ。往年洋客曾て此に登り、再び来たるも復た登る者無しと云ふ。今茲明治壬寅の夏、学校賜休を例とす。乃ち学友佐藤、山岸、諸橋の三子と遊ぶ。八月四日磯部に浴す。靜臥して連日の労を……」

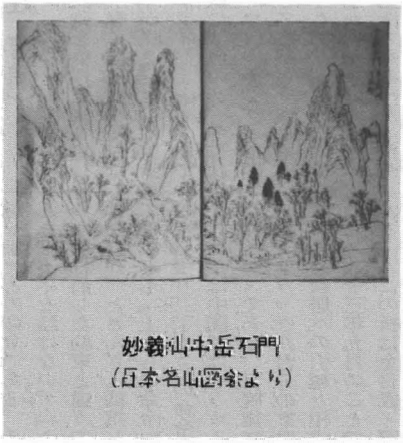
で始る名文は、中学生の文とは思えぬほどの立派なものである。因みに洋客とは、日本アルプスの名付親で有名な英人ウォルター・ウェストンである。またこの文章の末尾には、漁村の同僚で漢文の教師であった伊澤緯門先生の所見がある。それには

「筆と心と会し、神と境を契る。奇絶怪絶。殆ど山霊の助を得る者なり。抑、吾子は中学に在りて百科を兼修す。業間余事此の雅馴の文を成す。真に後生畏るべき者は漁村翁の有子なり。今者見て益を求む。敢て所見を呈す。府君と謀り、以って採択す。」

とある。父君の漁村先生と謀り、校友会誌に採択したという訳である。

更に軙はその後に「妙義山雑詠」という七言絶句五首を発表している。ついでながらその第一首「妙義社」を紹介する。

白雲喬木繞祠堂　白雲　喬木　祠堂を繞り
古石清泉氣自涼　古石　清泉　氣自ら涼し
髣髴隔溪傳鬼語　髣髴　溪を隔てて鬼語を伝へ
何来怪鳥一聲長　何れより来るか怪鳥一声長し


妙義山中岳石門
（日本名山圖會より）

この紀行文と詩を発表するにあたり、第五年級、渡辺屠龍と、初めて軙は後年まで愛用した「屠龍」の号を用いた事も特筆されることである。屠龍とは『荘子』に見える〝龍を屠る技〟である。龍は実際には存在しない想像上の生き物であるから、屠龍の技も、身に付けても現実には使うことのない無用の技ということになる。

屠龍軙は、明治三十六年に新潟中学校を卒業し、しばらく代用教員をした後、東京美術学校洋画科に進学して画家への道を歩み出すのであるが、父の漁村はその後もわが新潟中学校に教鞭をとり、大正三年に亡くなる前年まで奉職するのである。卒業後も軙は母校の校友会誌である遊方会雑誌にしば〳〵会員として投稿し、漁村もまた、度々詩や文を投稿している。

（次号につづく）

あの時新潟高校では

46回　高橋是成

縦横に走る地割れを横目で見ながらとにかく全校生徒をグランドに集合させた。出席簿による人数確認と怪我人の無いことを知りほっとする。あの揺れのなか市街地の様子を見ようとわざ〳〵屋上へ登った生徒がいる。大声で叱る。

津波を考えて海岸へ走ってもらった若い体育の先生二人が間もなく帰ってきて、はるか沖合いまで引いた海水が黒い固まりのようになって押し寄せたが思った程ではなかったとの報告をき、一安心。

早速、職員打合せ会（校長不在）で解散を決定する。余震の続くなかで

「諸君はいろんな事態に対処できる力を充分備えていると信ずる。従って同方向の者でグループを作り注意しながら帰宅すること。途中困っている人がいたら手助けをするように。（事実懸命に働いたとの礼を何件かいわれた。）尚、情報によれば万代橋は通行不能だが昭和橋は通れるとのことである。（この反対であることが解散後判明。緊急時の情報は的確に把握する必要を痛感する。）当分の間休校となるが授業開始については連絡網などを利用して伝える。電車は不通になっているので遠方からの利用者は学校へ泊めるからこの場に残れ。」

凡そこんな要旨の指示をして地震発生後約四十分で生徒を解散させた。

次いで学校近辺の生徒と職員で準備してあるだけ（六張か）のテントを前庭の松の下に張る。日陰を作り下草を利用した休憩所とする。正面玄関前には保健室から薬品を搬出し赤の十字旗を立て、養護教諭による臨時の救護所を開設。この頃已に地盤の弱いためか家屋の被害も大きかった田町方面の人たちが多数避難しておられた。夢中で飛出したとのことで裸足の人も多く切傷、打撲等の手当をする。恐怖と不安が去らず津波がくるそうだから屋上へあげて欲しいとの申出については今のところ大丈夫だと思うし、水が見えてからでも間に合うからと断わる。学校のトランシーバー二台のラジオをボリーム一杯にあげてニュースを流す。

偶々白根市の黒板業者と準備室で話し中に突然の大揺れ、新潟でこんな激しい地震はめずらしいと思いながらタイミングをはかって窓から飛降り急いで建物を離れる。目の前のピロテー式大体育館はそのまゝ倒れても不思議でない程左右に傾いていた。どうやら落着いたところで「白根市から来ている本校生徒は全員無事。一晩学校に泊めて明日帰す」との伝言を業者に頼んで送り出す。しかし道路は寸断され車の渋滞もあって到着は翌朝となり各家庭への連絡ができなかったらしい。

こうしているうちに川岸町にある身体障害者厚生寮の職員、生徒が助け合いながら一団となって避難してきた。生憎くどのテントも満員だし、いろ〳〵考えた末一階会議室にご蓆を敷いて休んでもらうことにした。万一の場合直ぐ逃げ出せるよう窓は全部あけたままにする。数名の負傷者の治療も済みこの日は泊まることになった。避難先を未だ県へ報告してないときき本校職員を自転車で連絡に出す。

午後も遅くなってから校舎の被害甚大だった商業高校のほか女子高校などの先生方が生徒を引率して避難または帰宅への誘導途中に寄られるのでお互いの情報交換ができた。

われわれが生徒を帰したのは早過ぎたかなと不安が頭をかすめる。電車通学の生徒を休ませてある木造平屋建の独立した工作教室では屈託のない顔で雑談している元気な姿にほっとしながら激励の言葉をかける。

夕食にと市から配給された被災者への握り飯が届いた時は有難く心から感謝したものです。

（新潟地震から二十年、元本校教諭の記憶による）

ニュースフラッシュ

沢田先生船にのる

67回卒の沢田俊一先生、（本校英語科）は、第11回東南アジア青年の船に、日本のナショナルリーダーとして乗船することになりました。この企画は、総理府主催でASEAN6カ国（日本・シンガポール・マレイシア・インドネシア・フイリッピン・タイの各国より年令18才～30才の青年、各35名ずつを選んで、約一万トンの新日本丸で、9月15日から11月14日までの間先の6カ国を巡航し、船内であるいは訪問国での体験と交流をはかるものです。

昭和59年度異動一覧

転出
全日制
教頭　桝潟昭夫→十日町高校
教諭　塩浦　彰→新潟南高校
教諭　石黒明徳→新津高校
通信制
教諭　若月忠信→新潟東高校
教諭　水落義樹→新潟西高校
事務　事務長　坂下勇→三吉社会福祉事務所長

転入
全日制
教頭　奈良孝基→新潟江南教頭
教諭　遠山圭一→新潟商業高
教諭　高橋則雄→長岡高校
通信制
教諭　久我正史→新潟商業高
　　木村　豊→三条高校
事務　事務長　阿部秋由→新潟南高

連載

ハイティーン水泳 新中・新高 ⑤

60回　平田大六

10　π（円周率）を読む

夏が過ぎ、水泳の華やかな戦果の語り草のなかにも、「平田」の名前はついぞ現れることなく、二年生のシーズンは終えた。

そして、シーズンオフの例の砂浜トレーニングがはじまったのだ。広漠とした砂丘の果てで荒れている日本海を見ながら、疑問は次々にわいてきた。県境の田舎からきて、大げさに云えば、志をたてて水泳部へ入ったのに、上達しないまゝに仲間に追いこされ、みじめに萎縮してゆこうとしている青春を思った。

いっそのこと、水から足を洗ってしまおうかしらん。が、ほかに私に何ができる?。

担任は山川末吉先生だ。そして数学を教えておられる。時に口沫をとばして話されることがある。無限やゼロというような数学の根元の概念にせまる話をよくされ、その時佛教の思想が見えかくれする。私は問題の解答よりも、そのテの話に傾斜していった。

円周率のときに、「π」（パイ）の値を、三十桁ほど紙も見ないで黒板に書かれたときに私はおどろいた。この初老の風采のあがらない数学の教師が、当時私にとっては最もステータスな円周率をこんなに暗記しているのだ。

これだなと思った。

やっぱり泳ぎつゞけるしかないな。

私は、脱線のラク書きをすぐ消す山川さんのクセを知っていたので、大いそぎでノートにとどめ、シャニムに暗記した。

一九七二年四月、60回生は恩師を招いて上越湯沢で同級会をした。私は、ます〳〵老いられた山川さんへお酌にゆき、割箸の袋を開いてそこへ円周率を三十個書いて見せた。かつての数学の恩師は、じっと私をのぞきこまれた。そして、おまえを見そこなっていた、とおっしゃられるのだ。

そんなのでないんだ。昔の通信簿をなおしてくれと云ってるんではないんだ。私はお礼を申し上げたかったんだ。カンチガイされておられる。そう思った。山川末吉先生の目の片方から、涙の線がおりてきたのを感動的に記憶している。

（つづく）

カバ教頭の思い出

39回　田中正一

（元大阪造船勤務造船技師　現東洋水産㈱顧問）

玲瓏の天仰ぐとき
胸颯爽の意気に満ち
廓寥の地を望むとき
……

50数年ぶりに誰れはばかるところなく、大声をはりあげ校歌をうたっていたら、全く突然に胸にジーンと何かが来て、瞼の裏が重たくなった。

いささか気恥かしい思いにかられ、この異物を鼻孔の方へ落し込もうと顔を天井に向ける。

やおら暫くして、薄目をあけて周囲をうかがうと、どうやら目に異物の入った運の悪い奴は私一人だけではなさそうだ。

会長、幹事の皆さん方の準備も見事に、青山39会は先程からスケジュール通りに進行し、今は皆川君の指揮で校歌の斉唱が最終節まで続いている。

国語・漢文の担任だった「カバ」こと、渋谷教頭は或る日の講義の途中に急に「新中の校歌は間違っている」ととんでもないことを言いだした。

何がどうして、こんな発言をされるようになったのか、また、私達の組だけで言われたのか、そこいらあたりの事情は全く忘れてしまったが、要するにカバさんの言われんとするところは、

一、「玲瓏の天……」というのはおかしい。玲瓏とは、玉が光り輝く状態をあらわすもので、大空の形容詞にすること自体が過っている。

一、「颯爽の意気に……」もおかしい。というのは颯爽というのは姿や行動が立派なのを形容するもので、意気などという無形のものに使うべきでない。

一、「廓寥の地を……」廓寥もいろいろな意味があるので必ずしも適切な使い方でない。

私の仇名もカバで、体操のクズマン先生なんかは出欠をとるときでも本名を呼んでくれず、いくたびか情ない思いをさせられ、つくづく、この仇名が嫌いであった。

坊主憎くけりゃ何とやら、同じ仇名の渋谷教頭にもあまり好意を抱いていなかった私は、「カバ、なに寝言をぬかすか！」ぐらいの軽い気持で聞き流していた。それが冒頭に書いたような次第で、あらためて、忘れかけていた校歌が意識線上に浮かびあがり連想的にカバ先生の大論説を思い出した。

思い出したが縁とばかり、暇にまかせ、小学館の国語大辞典をひいてみる。

一、玲瓏（れいろう）
玉などの透きとおっているさま。
明るく光り輝くさま。
金属や玉などが触れあって冴えた音でなるさま。
音声の澄んで響きわたるさま。

一、颯爽（さっそう）
人の姿、態度、行動などがさわやかで勇ましいさま。
きりっとしていて、見て気持のよいさま。

一、廓寥（かくりょう）
からりとして広大なさま
むなしく、ものさびしいさま。

さてこうしてみると、カバさんの論據にも一理あるようでもあるし、だからといってオーバー過ぎるような気もする。

専門家でもない私には結局のところ何も分らないというのが本音。

敢えて私流の屁理屈をひとつ。

天寥とか天球とかいう熟語はこの宇宙は地上での観測者の頭上を中心とする半経無限大の球体に投影できるとする仮説にたったものとか。

我々素人が考えても、この説はどこかおかしいが、百歩ゆずって素朴に丸い球体であると解釈すると、「玲瓏の天……」という言葉にも、そう目くじらを立てて、あげつらうこともあるまいと思える。

「玲瓏の天」から燦々とふりそそぐ春の光をいっぱいに浴びて、喜寿をめざして元気に進もうではありませんか。

ニュースフラッシュ

弁論大会でソビエトへ

昭和59年度朝日新聞主催、ロシア語弁論大会で小柳栄子（東京外語大三年在学中　90回）が二位に入賞。約二週間の予定でソビエト研修旅行に紹待される。

昭和58年度 青山同窓会費納入者追加分

（1月より3月までに納入のもの）

郵便振替口座　新潟5-4455青山同窓会
第四銀行学校町支店口座　275210青山同窓会

会費納入のお願い
年会費1口 1,000円
できるだけ1人2口でお願いします。
納入先　新年会・総会の会場
又は母校同窓会事務局へ

期	氏名
27	奥田静雄
30	渡辺浩太郎
31	佐藤静午
	守口東平
	村田忠夫
32	小林力三
	笠原六郎
	本間忠孝
	丸山岩治郎
33	藤島寛
	磯野英男
	笹岡了一
34	北村秀以
35	石本省吾
	小山久一
	寺田利男
36	若槻博
	山田敏雄
37	高橋睦治
	田中郁郎
38	野口敏雄
39	関根進
40	井上三郎
	小柳毅
	高橋綱吉
41	高橋英雄
	高橋正蔵
	宮島磊次
	永井昇平
42	長谷川友也
	阿部貞一
	桑山一郎
	佐藤政治
	大谷友之助
	飯田利男
43	皆川正
	竹林松雄
	山谷隆二
44	錦織登美夫
	仁多見一彦
45	鈴木茂男
	長谷川渙
	小林直弥
46	鍵冨春雄
46	福島弘
47	杉山弘治
	町田一郎
	中川保
	藤田三之助
48	大橋明自
	米沢純三
	高木義雄
	水戸正郎
	川嶋由郎
	高松利男
	飯田大透
	山口素夫
	林俊太郎
	五十嵐明
49	梶山勝清
	江間正二郎
	柳生茂
	池主淳
	赤松元敏
	荻野博
	志智勇
50	宮島新
	五十嵐喜八郎
	倉品治平
	諸橋謙一
	川合源治
	原田敏雄
51	村上安仁
	小林欣一
	勝山新爾
	菅野浩
	百川和雄
	柏森喬
	高沢常夫
52	稲村秀元
53	大谷邦夫
	玉木将二郎
54	斉藤雅彦
55	梅沢竹太郎
	逢坂修造
56	高見久義
57	吉田正光
	南雲照三
56	久保田剛敏
57	滝沢宇平
	加納禎雄
	花井諦二
	塩見戎三
	渡辺友也
	近藤源也
58	渡辺好博
	解良醇一
59	大島洋一
	宇佐美裕三
	小柳佳一郎
60	熊倉正司
	本田是
	奥田達也
	落合夏樹
	熊倉登
61	横村一郎
	三沢博敬
	村田俶
	石井壮一
62	丸田宥吉
	青柳正男
	木村亮
	遠山晴夫
	鈴木勉
	山崎敬介
	鈴木徳義
	白井民司
	渡辺真
63	村田正
64	吉田豊祐
	内山武夫
	森浩通
	仲村恒
	土屋利之
65	安宅厚
	石田三郎
	入山八郎
	富永聡
66	加藤勝弘
	福地利明
	池政男
67	横木正幸
67	菅沼重登
	前田邦光
	高倉亨
	三堀浩
70	田中靖夫
	清水伴雄
	佐藤一也
	内藤栄樹
71	篠田正志
	風間英昭
73	樋口正昭
75	渡辺研二
	堀一
76	熊木徳正
78	小林敬直
	河田弘行

通信制
198名

峨眉山の月

60回　小林智明

峨眉山月半輪秋
影入平羌江水流
夜発清渓向三峽
思君不見下渝州

有名なこの李白の詩を、渡辺団長先生の漢文の時間に学んだのは、もう三十年以上も昔のことになった。

その渡辺先生に「おい、峨眉山の月を見に行こっや。」とお声をかけられ、去る六月十四日より十二日間の行程で出発した。

一行は渡辺先生を団長に、富川潤一画伯（三十四回）を副団長に、気の合った新潟勢ばかりの八人であった。

行程は六月十四日に成田を出航、その日は香港泊り。翌十五日、香港九龍駅より汽車にて中国広州入り。曽遊の南湖賓館に泊った。

実は、二年前にやはり渡辺先生に同行して、成都、重慶、三峡、武漢、洞庭湖を旅行した時に泊った宿で、昨日のことのように思い出され、懐かしかった。

十六日、広州より週三便という飛行機に乗り雲南省の首都昆明着。昆明湖に遊んでから午後のバスで石林に向う。三時間半かかって石林着。何億年か前に海底が隆起して出来たという奇峰、怪峰の石の林に遊んで石林賓館泊り。夜は雲南の少数民族であるハニ族の娘達の踊りを見学した。彼女等の顔だちは我々日本人に類似していた。歌垣の風習があるという。

十七日、昆明に戻り、午後は西山に遊んだ。夕七時半に昆明駅より夜行列車で四川省の成都に向う。車中雲南の桃や胡桃を食す。持参の日本酒や茅台酒も賑やか。

十八日、夜が明け、成昆鉄道は四川省の山中をひた走る。朝、昼は車中食堂車。夕方四時過ぎに目指す峨眉駅着。通訳の楊さんに出迎えられてマイクロバスに乗る。途中の黍畑の道より峨眉山（三、〇九九米）の偉容を仰ぐ。その夜は峨眉山麓の報国寺に近い紅珠山賓館という静かな宿に泊す。夜、一行はベランダに集り、日本酒を酌みながら月待ちをしたが、ついに出でず、明け方には小雨も落ちた。

十九日、峨眉山に登る。万年寺小学校の下の部落まで一時間くらいバスに乗り、そこから登山道。高令の富川先生は大事をとられて強力を雇われ鞍上にて行く。陸続と登拝の人が続き、わらじや竹の登山杖なども売っている。一時間半の登りで十一時に万年寺という中腹のお寺に着く。国宝である白象上の普賢菩薩を拝す。客堂で昼食の接待にあづかる。楊さんの説明でいろいろ美味しく頂く。有名な万年寺豆腐は皆が何杯もお替りをした。

峨眉山万年寺　富川潤一画

頂上まで往復するのはあと二日もかゝるということで此処より下山。寺の庭には石榴、梔、夾竹桃などが咲き匂っていた。

双橋という滝を抱えた二条の深い渓にかかる二つの橋が並ぶ処に下山。附近の勝景に遊んだ。清音閣という立派なお堂があった。

夕刻、山麓の村に下山したら雨、迎えのバスは故障で大分遅れたが、峨眉から一時間ほどで岷江、大渡河、青衣江の三本の大河が合流する町、楽山に着き嘉州賓館泊り。

二十日は高さ七十一米という楽山の大磨崖佛を見学、凌雲山に遊んで成都へ。途中の峨眉山は蘇東坡出生の地。父子を祀る三蘇祠を弔う。

曽遊の成都は錦江賓館に泊り、翌二十一日は杜甫草堂、望江楼、武侯祠などを見学して夜の飛行機で広州に戻り、二十二日は端渓の硯を求めて肇慶に泊る。二十三日、七星岩に遊び、硯工場を見学。広州泊り。二十四日香港。二十五日に無事帰国、新潟帰着。

峨眉山の月はかくれて見えなかったが、四川、雲南、広東の中国西南部を廻った楽しい旅行であった。

最後に渡辺先生の旅中の詩を一首ご紹介する。

峨眉山無月　琴舟道人

峨眉山月奈辺明
細雨蕭々至五更
展轉断腸千里客
思君不見向南京

峨眉山月　奈辺にか明らかなる
細雨　蕭々　五更に至る
展転　断腸す　千里の客
君を思へども見えず南京（成都）に向ふ

〃小柳文庫母校に〃

小柳篤二氏（第一〇回卒）より、九十周年記念事業寄付金一〇万円也をいただき、かねてより、後世に残すにたる品にかえ本校に末永く置く案が考えられ、その選定にあたっておりました。

此度、會津八一師の作品の一部を購入、次の七冊を本校圖書館に揃えました。

「歌をよむには」、「印象」、「會津八一の法帖」、「村荘雑事」、「続秋艸道人の書」、「菊のつくり方、會津八一自筆本」、「南京餘唱」以上の七冊です。ご紹介をすると共に、本紙を借りて小柳篤二氏に厚く御礼申し上げます。

母校同窓会総会に先がけ青山40回総会ひらく。

（慰霊祭、名称確認、会則審議など）

40回　井上三郎

昨年卒業50周年を迎え、全国的、ブラジルにまで案内し物故者の慰霊祭や、「五十年の回顧」特集号を発行して意気揚るわが青山40会（仮称）は、母校総会の開かれる7月20日の同日、開会前の午後3時より田中ホテルで開催する。

昨年5月、新潟駅前の第一福対協で行われた総会は、内藤、坂井正明両名の格別の準備と設営によって、異例、格調高い物故者慰霊祭から始まったが、今年は会費千五百円と低額であり、会場が一時間以上も長く使用でき、その成果と、又会場も近い母校同窓会総会への「流れ」出席が期待される。

誠実温厚の人
悼　枝並重太郎さん
追　逝く（昭和8年卒業）

40回　井上三郎

庭球部員、派手な人でなかった枝並さんは、教室でも同様目立つことなくこつこつと特に理数に努めてか、長岡高等工業（当時）に入り、同校で俄然秀技の成績を揚げられ卒業後直ちに国鉄管轄下の小千谷変電所に技師として入省。若き日の技能の発揮は上下同僚、特に下に柔軟で、しかも温健な指導は衆目を集めた。

途中車務も所を得た兵科にあったが不運にも軍歴において恩給取得に至らず。除隊後国鉄に復し、再び清水トンネル近くの特殊工事に特技を生かし、これを退職後も敏腕を買われて嘱託として自宅新潟紫竹より、上越線後閑附近の新幹線関係の配電方面に、月来金帰の勤勉の生活を続けられていたが、この稼動中に昭和55年9月、温順同君にならう夫人が癌疾に急逝。これを同君、二男、一女の子女も知らぬ非劇に遭逢。この度（昨58年10月末）琴瑟相愛の夫人のあとを追うごとく、脳溢血にて急逝された。同窓同期50余年の知偶を憶い、この訣れを禿筆をもって綴るとき、万感。

死亡報告

42回　前田政二氏　昭和59年3月14日逝去。

昭和16年12月、新潟医科大学卒業後、海軍病院で軍医として勤務。

昭和24年4月～昭和40年4月、済生会病院初代院長として、今日の立派な病院の基盤を作られた。その後曙町で医院を開業。4～5年前より病をえて、療養につとめていたが、遂に幽明境を異にされました。

心からご冥福をお祈りします。

39回 古稀祝パーティー

39回　福山　健

昨年11月、同期各位に案内を出して3月25日に白山会館で古稀祝を行うことを予告した。

今春はいつまでも寒さがつづいたが当日定刻午後1時、続々と集まった顔ぶれは31名県外3、県内5、市内23、いずれも久しぶりの今日の集まりを楽しみにしての出席。大元気。先ずは写場で往年の美少年たちの年経たる初老の姿をパチリ。次いで白山神社の本殿奥深く一同正座し、神官の読み上げる物故者姓名（合計78名）に今更ながら惜別の念を深くし、その冥福を祈り白衣の乙女たちの鈴振り鳴らす舞いにしばしの忘我。式典を終え、しびれる脚をひきながら会館2階の会場に移る。

地元代表上原虎雄君、前代議士阿部助哉君の挨拶、乾杯により懇親会に移る。白勢君味方君等出席常連の顔が見られないのは如何にも残念。美声（？）皆川竹ちゃんの応援歌、次いで野球人生の白髪スタイリスト皆川トラ君の音頭で旧校歌合唱、美人ホステス6名のサービスに得意の詩吟をうなる者あり、民謡を歌うものあり。例年の会合は別として、次回目標は80才の喜寿祝とすることを約束して一同散会す。

70才の峠に立って

ここまでよく越えてきたねさてこの次はまだまだ長いぞ一息入れたらまた歩き出すよ頑張れ、頑張れ。

尚、今回は「近況短信」と題して、ハガキ返信を集録し小冊子を印刷、住所確認の117人の同期全員に贈った。

41回生（昭和9年3月卒）のプロフィール

41回　本間　敏雄

わが41回生は静かなること深山幽谷の如く、会報に登場することあまりなく、常に内なるものを秘めて、自ら表面に出ず今日までに至っている。

ところが今回さる会員からすすめられることあり、敢えて会報の紙面に出る羽目になった。

わがクラスは毎年秋に会を開催することにしており、昨年は10月15日、新潟、「福富」に開かれた。これがその時の写真である。今回は卒業以来初参加の人もあり、仲々賑かであった。やがて古稀を迎えんとする面々であるが、この元気な姿を見られよ。

今年は母校を卒業して50年にあたるので秋には何か記念事業をやりたいと計画を立て既に5人の幹事を選出してもらっている。

クラスの一員で故俳人中田みづほ先生の門人丹羽玄子は水打って余生いよいよ潔くの名句をものしたが仲々味わいある句ではなかろうか。

さて60余年の歳月を振り返ってみると仲々素晴らしい道を辿っているクラスメートがいる。思いつくままに、二、三、紹介してみよう。

ガンの疫学的研究で幾多の業績を残し、学界でガンに関する賞を全部受けたY君。

作家山本周五郎の作品の中に出て来る「赤ひげ」にも通ずる風格を持つ市井の医師F君。本県公認会計士第一号のM君は目下斯界で活躍中。学生剣道使節として早稲田大学を代表してH君は、ドイツ、イタリーに渡ってその妙技を公開した。第2次世界大戦中航空機製作に専念し、戦後一転して「地球物理学」を専攻し、「風」の研究で世界的に名声を得て、アメリカ、イギリス、オーストラリアの大学で講義をしたI君。沖縄でスピルリナ（海草の一種でこれから薬をつくる）関係の研究事業に携わっているN君。その他洩れた人も多々あるがまさにわがクラスは多種多様な生き方をしている。古稀も近いがまだまだ意気軒昂なクラスメイトが多い。

67回卒業25周年同期会

昭和34年に卒業したので、67回生は今年で二十五周年になる。五年前の54年に卒業20周年の会をお盆にやり、その時まとめた名簿から案内を出した。今各界で活躍の真盛りとて、全国を転勤まわり中の者も多く、住所不明で戻って来た案内も多かったが、元の勤務先に電話して、再発送したりと、幹事の手間は大変であった。それでも当日6月23日には、遠く奈良や大阪、又仙台からの参加をはじめ、48名の参加があった。今回は岩室温泉高島屋一泊で、時間はたっぷりある。主任の恩師7名中外川先生はすでに亡くなられ、他の先生方も病中、病後とて、小田一彦先生が唯一人出席され、懐かしいごあいさつをいただいた。乾杯の後一人一分という事でマイクを持ってあいさつ。在校中の思い出から、現在の事まで、延々と続く。仲々うまい。さすが40数年無駄に生きてきた者はない。忘れていたエピソードを思い出し、参加者のスピーチが一巡したのは九時近かった。それからは杯を持ってあっちへこっちへと旧交を暖め合った。残念ながら所用でと、その夜のうちに新潟へ戻った者もあったが、残りは泊り組、宴会場を出てからも、大部屋に席をかえ、酒、ビールを持ち寄り、夜中の2時～3時まで談はつきなかった。

翌朝、朝食前に庭に出て、記念写真をとったのだが、昨夜帰った者がいて全員でないのが残念だった。又5年後に元気で会おう。中間の年に、東京との中間でやろう。仲間から、カンパを集めて名簿も整備しよう。等々、要望がつきず、名残りおしくも散会した。尚我々の期は女性も居るので、その出席も多数得て、芸者は抜きであったが、大変楽しかった。

編集後記

★ 本号は例年の会報に比して、クラス会報告記が少く、その代わり、寄稿等が多く、いつもと感じの変わった紙面になりました。寄稿は一人あたり400字詰め3枚以内位で今後ともたくさんお寄せいただきたいとお待ちしております。

★ 紙面割付の都合等で、玉稿一部カットさせていただいたものもあります。お許しの程を！。

★ 読後の感想、ご批判等を、お寄せ下さい。今後のよりよき紙面作りに生かしたいと思っています。